

大学生男女の身体寸法ならびに被服寸法に関する認識

－ 身体計測値との比較 －

Cognizance of Body and Garment Size among University Students

－ By Comparing the Cognized Size and the Measured Size －

大村 知子・渡邊 敬子

Tomoko OMURA and Keiko WATANABE

(平成4年10月12日受理)

Summary

The purpose of this study is to observe how much the standard sizing system fulfils its intended function among university students, in order to develop an improvement plan for making ready-made clothing better conform to the body.

The subjects of this study are university students in Shizuoka Prefecture, Japan. The questionnaire about their cognizance ready-made clothings and the standard sizing system of garments and their body size and the body measurements were taken 187 students in 1990.

The results were as follows:

1. Both male and female felt ready-made clothing would not conform to their body, especially on upper leg girth (about 40% male) and sleeve length (about 40% female).
2. Most students didn't know what clothing size labels actually referred to, even though they were purchasing their own clothes.
3. Students didn't know either their own body size or body type. It was one of the causes of ill-fitting clothes.
4. Even though females didn't know their correct under garment size, only 10% tried on garments in the fitting room before buying them.

緒言

被服の快適性は大別して動体・生体としての人体の機能特性と美的特性に分けられるが¹⁾、被服の身体適合性は審美性や動作性などを通じて、この両面に深く関与するものである。現代は衣生活の社会化が進み、調達行動においては既製衣料の利用が大半を占める。心身ともに快適な着装を実現するためには、先ず、身体に適合する既製衣料を選択し、それを着こなす能力が重要となる。

* 静岡大学大学院教育学研究科 院生

近年、大学生の衣生活意識や服飾の嗜好^{2)~6)}やJ I S規格に関する認識の実態など⁷⁾⁸⁾についてはいくつかの報告がされている。しかし、自己の認識する衣服寸法と身体を実測した値との比較を含む研究は少なく、特に男性も対象とした男女揃った調査結果は見あたらない。

そこで、本調査はJ I Sによって定められた衣料サイズ規格や身体計測方法が、現在の衣生活行動においてどのように機能しているのかを捉え、被服の身体適合性向上のための課題を検討するために調査を実施し、考察を試みた。

調査は静岡県に在住する大学生男女計187名を対象に、既製衣料やサイズ表示に対する意識について面接法によるアンケート形式の質問紙調査と身体計測調査を実施した。その結果、大学生は既製衣料が自分の体に合わない部分があるという意識を持ち、その原因は既製衣料サイズ規格やサイズ表示に関する認識の程度が低いこと、自分の身体寸法や衣服寸法を正確に認識していないことによるなどの知見を得たので報告する。

方法ならびに資料

1 方法

本報告は大学生を調査対象として、静岡県に在住する19歳から21歳の男性73名、女性114名にアンケート形式による質問紙調査と身体計測調査を実施した。調査は1990年7月から9月にかけて、面接調査法により質問紙調査を実施した直後に身体計測調査を実施した。質問紙調査の調査項目は、調査対象者が認識している自己の身体寸法、既製服の身体への適合に関する意識、衣料サイズ表示に関する認識ならびに被検者の基本属性などの計46項目である。身体計測調査の方法は工業技術院体格調査の計測方法⁹⁾に準じ、マルチン式計測器具などを用いて実施した。計測項目は被服設計に関わりが深いと考えられる男性52項目、女性55項目である。本報では衣料サイズ規格における基本身体寸法である身長、バスト、チェスト、ウエスト、ヒップ、アンダーバストの6項目を用いて、計測前の本人の認識と実測値との差などについて検討を試みた。

2 資料について

調査対象の年齢は19歳から20歳である。被検者の体格について平成2年度官庁報告の20歳男女の身長ならびに体重と比較すると¹⁰⁾、男性はほぼ平均的集団、女性はやや身長が高いがほぼ若い日本人の一般的体格を示す集団といえる。次に、モリソンの関係偏差折線によって全国値(1981年実施工業技術院体格調査資料¹¹⁾、20歳から24歳男女)と比較し、今回の対象者の体型を概観すると図1の様である。すなわち、10年前より男女ともに胴くびれが強く、ややウエストラインが高い体型であった。さらに、J I S衣料品規格の2元範囲表示規格¹²⁾と照合した結果(図2、図3)は、男性の80.8%、女性の93.9%が規格の範囲に属した。

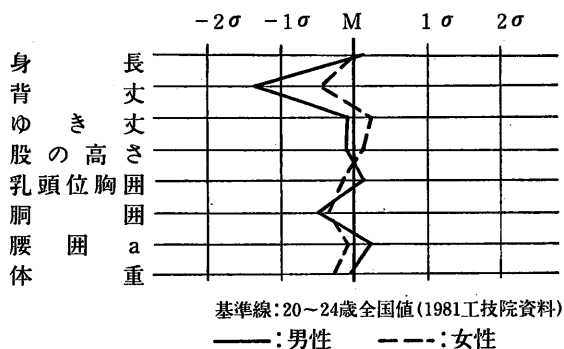


図1 モリソンの関係偏差折線による今回の資料と全国値(工技院資料)との比較

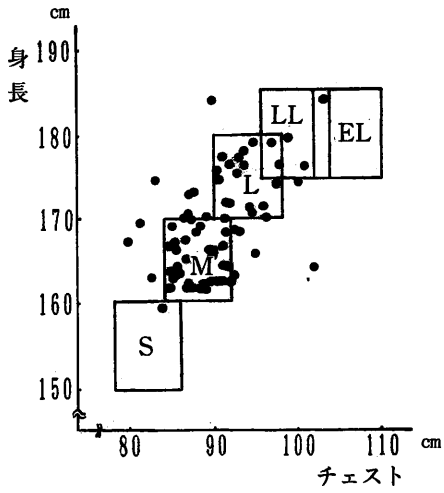


図2 男子の身長とチェストの分布と2元範囲表示との関係

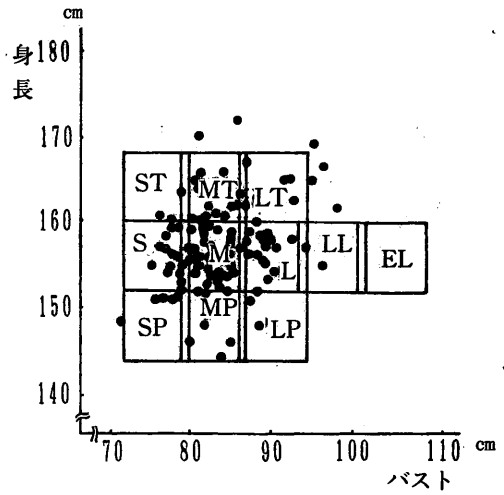


図3 女子の身長とバストの分布と2元範囲表示との関係

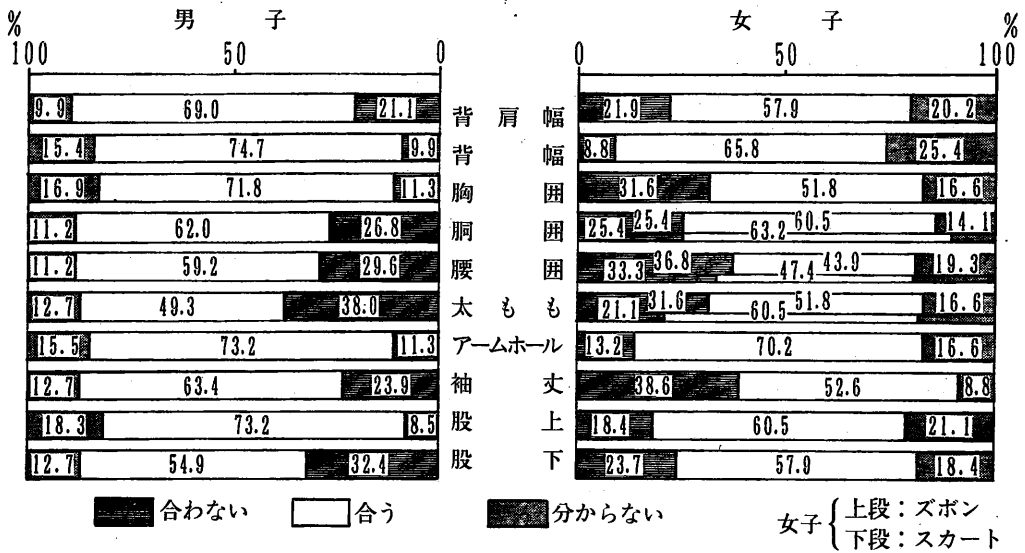


図4 衣服の部位別の身体適合に関する意識

結果および考察

1 既製衣料の身体への適合性に関する意識

既製衣料品の身体適合感に関して、4段階尺度で回答を得た結果、「やや合わない」と答えた者は男性の38.0%、女性の31.6%であった。さらに、男性はブレザーとズボン、女性はブレザーとズボンとスカートに関して服種別・部位別の適合感について合わない・合う・分から

ないの選択肢で回答を得た。結果は図4に示す通りである。男性は大腿部、女性は袖丈に不適合感をもつ者の割合が4割程度見られるのを始め、男性は股下、腰囲、胴囲、女性は腰囲、胸囲などを特に不適合と感じている。ほとんどの者が平均的体格であったのにも関わらず、既製衣料品の適合感は低い。これらのことから、不適合感の原因を検討し、より高い適合性を得るための改善に向けて対策を検討する必要があるといえる。原因には被検者の衣料サイズ規格の理解や活用に関する問題と生産者の衣服寸法の設定のしかたや規格の基準値自体にも問題があると考えられる。そこで、まずは前者に関して、既製衣料サイズ表示に対する理解と自己の体つきに対する認識の2点からさらに検討を試みた。

2 サイズ表示に関する認識

既製衣料にはサイズ表示が義務づけられているが、男性の約99%、女性の100%は、その存在を「知っている」または「ほぼ知っている」と回答した。これは、日本家政学会被服構成部会の全国調査の結果¹³⁾をやや上回る結果であり、今回の対象者がサイズ表示の存在を知覚している割合は高いといえる。

次に、男女にそれぞれ具体的に6例のサイズ表示を示してそれぞれの表示内容に対する回答を得た結果を表1に示す。「S.M.L.」の2元表示を「わからない」と答えた者は他の項目に比べると少ない。これは学生にとって最も目にする機会が多い表示のためであると考えられる。しかし、正しく理解している者は全体の半数程度であった。「11BR」「94B5」などの3元表示については、女性の体型を表す「B」を除いて正解者の割合が10%以下と非常に低かった。「ワイシャツについている38-78などの数字」については、身体部位の名称を正しく知っていないことが原因と考えられる誤答が多かった。また、実際に着用する機会が多い男性の正答率が、女性の正答率を約5%上回った。このことや「S.M.L.」の正答率が高いことから、実際に自分が利用する機会が多いサイズ表示に関する方が認識している割合が高いといえる。すなわち、大学生は衣料サイズ表示について経験的に知覚しているために、利用頻度が高い表示は知っている割合が高い。その一方で誤った認識のまま利用している割合も高い。大学生は衣料サイズ表示に対して、明確な認識をもって判別できる知識を持つに至っておらず、多くの者はサイズ表示の意味が読みとれないまま被服を選び、着装している実態が明らかになった。

3 自己の身体寸法と衣料サイズに対する認識

大学生が基本身体寸法としての身体寸法をどの程度認識しているかを分析するために、本人が認識している自分の身体寸法と実測値との差を求めた。サイズピッチを参考に身長は5cmを1ピッチ、周径項目は3cmを1ピッチとして、差の絶対値をピッチ単位で検討し、その出現率で示した。結果は、図5に示す通りである。身長について「分からない」と回答した割合は男女平均すると7.8%であるのに対し、胸囲、胴囲、腰囲について「分からない」と回答した者は男女の平均で48%、54%、71%であり、周径寸法を知らない者の割合が高かった。身長の認識と実測値の差が±5cm以内の者は全体で90%であった。これに対し、図5で示したように胸囲、胴囲、腰囲についての認識値と実測値の差が±3cm以内の者の割合は、胸囲は男性10%、女性45%、胴囲は男性12%、女性54%、腰囲は男性3%、女性30%である。大学生は周径の寸法を正確に認識していないことが分かった。これは赤根¹⁴⁾やミセスを対象とした山名¹⁵⁾の結果と一致する。特に男性の腰囲の認識が低かった（内11.0%の者は実際より6cm以上小さく認識していた）こととこの部分の不適合感が特に高かったことなどから、自己の身体寸法を正しく把握せずに被服を調達していることが、既製衣料が身体に適合しないと判断す

表1 サイズ記号に対する認識

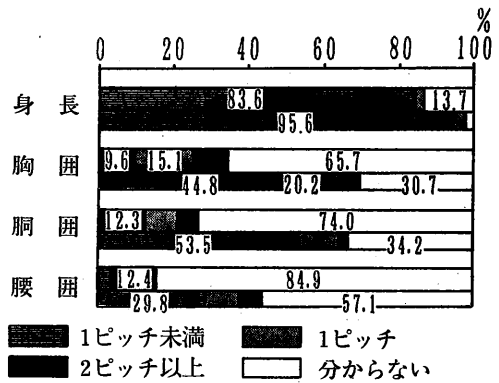
(%)

表示例	男 子			女 子		
	正答	誤答	分から ない	正答	誤答	分から ない
Tシャツの「S, M, L」	49.3	24.7	26.0	49.1	26.3	24.6
Yシャツの「38-78」	15.1	35.6	49.3	9.7	34.2	56.2
「11BR」の11	-	-	-	9.6	34.2	56.2
「11BR」のR	-	-	-	7.9	20.2	77.0
「11BR」のB	-	-	-	22.0	15.8	62.3
「94B5」の94	6.9	4.1	89.0	-	-	-
「94B5」のB	2.7	4.1	93.1	-	-	-
「11BR」のR	1.4	2.8	95.8	-	-	-

る要因であるといえる。著者らの調査¹⁶⁾では、中学生は学校における定期的な身体計測の結果によって、自分の身体寸法を認識していることが分かっている。これは今回の身長認識値が実測値より高かったこととも一致するといえる。しかし、健康管理のための身体計測方法と衣服寸法基準のための計測方法とはバストやヒップにおいては異なり、学校での健康管理を目的とした計測値を知っていても基本身体寸法を知っているとはいえない。被服教育においては、身体寸法を正しく把握することが被服を快適に着こなすのに必要であることを知らせることと、身体計測の機会をつくり、さらにその計測方法を正しく習得させることが必要であると考え。

次に、自分の「体型」や「号数」についての認識の回答を得た。男性で自己の「体型」を認識している者は13.3%、「号数」は4.2%であった。女性で「体型」を認識していた者は18.2%、「号数」は82.5%であった。すなわち、男性の95.8%は自分の「号数」を、女性の81.8%は自分の「体型」を知らなかった。さらに、その認識の精度を検討する目的で、対象者が回答した号数や体型と実測値から求めた該当号数や体型とをクロスして検討した。表2は最も記入回答率の高かった女性の号数についての認識サイズと実測値からの算出したサイズとのクロス集計結果である。認識と実測号数が一致した者は合わせて28%である。認識と実測に誤差が認められた者は半数以上で、そのうち2ピッチ以上の誤差で認識していた者が18.8%であった。一方、男性の身長の号数表示について認識と実測が一致した者は一人もいなかった。

以上のようにサイズ表示に対する理解が低いことや自分の身体寸法やサイズを正しく認識で



上段：男性 下段：女性

差は絶対値で身長は5cm、周径は3cmを1ピッチとした

図5 身体寸法の認識値と実測値の差

表2 女子の自己の認識する号数と計測値から求めた号数

(%)

	計測サイズ							号	合計
	3	5	7	9	11	13	15	17	
5号	0.9	-	-	-	-	-	-	-	0.9
7	-	1.8	4.4	0.9	-	-	-	-	7.1
9	-	5.2	7.9	17.5	6.0	5.2	1.8	0.9	44.5
11	-	-	1.8	4.4	4.3	8.7	1.8	1.8	22.8
13	-	-	-	0.9	0.9	1.8	0.9	1.8	6.3
15	-	-	-	-	-	0.9	-	-	0.9
17	-	-	-	-	-	-	-	-	0
19	-	-	-	-	-	-	-	-	0
分からない	-	1.8	2.6	2.6	5.2	2.6	1.8	0.9	17.5
合計	0.9	8.8	16.7	26.3	16.4	19.2	6.3	5.4	100.0

注) ゴシックは自己の認識と計測値が一致した者

きていないことが、既製衣料が不適合であると判断する一因になっていると考えられる。今回の対象者の体型や号数を実測値から求めた結果(図2、3)のように、JIS規格の範囲から外れると判断される者は僅かであった。すなわち、自分の体に適合する被服を選択できるようになれば、適合感は向上するものと予想される。そこで、どの様にして自分の身体に適合する被服を選択するかについての情報提供が必要であるといえる。

また、実際には17号に該当する者が自分は9号であるとし、さらに不適合と感じていない例がみられたことや部位別の適合感に関する質問に対し「分からない」と回答する者が1割以上見られたことから、大学生は被服着用時の適合性を評価する能力が低いと考えられる。動体および生体として着心地がよいとはどういう状態か、シルエットが適正に保たれているとはどういう状態であるのかが分からず、適合度を判別する能力がないといえよう。このように、被服の身体への適合を求めることや、サイズ規格を正確に理解して活用する努力をしていないことには問題があると考えられる。適合度を判別する能力や感性を磨くことも消費者として重要な事項であるといえる。

一方、男性の号数の認識では該当号数より2号ないし4号小さく認識する傾向が認められたことや女性で9号、11号と回答する者の割合が実際の分布に比べ非常に高いことの原因には、経験的に自分のサイズを認識していることが挙げられる。すなわち、大学生女子を対象とする調査では「合う既製服の表示寸法を覚えておく」ことが自分のサイズを知る方法のひとつであるという結果を得ていること¹⁷⁾、さらに市場の販売枚数など考え合わせると、正しいサイズを知らず店頭にある商品の中から選択し、着られた被服のサイズを覚えておくためと推察される。既製服を供給する側は生産効率のために1サイズの適合範囲を拡大するような被服設計をする傾向がみられることと、ゆとりが多くルーズフィットの構成にして、若い女性のスリム志向の心理をついたレギュラーサイズの表示で対応するという傾向もみられる。このような生産者側の販売作戦にも問題が存在する可能性がある。しかし、先ず重要なことは消費者が身体計測に基づいて自分の体型や号数を正確に認識し、身体適合性を評価する感性をもってそれぞれの状況に対応して選択や着こなしができるようになること、さらに表示が不適当と考えられる時にはクレームを付けるという積極的な態度をもつことではないかと考える。

4 ファンデーションのサイズの認識

被服の中でも特に身体適合性が要求される服種であり、JIS規格においても独立した規格として構成されている女性のファンデーションについても検討を試みた。先ず、自分でファンデーションを購入している者は95.6%であり、ブラジャーを使用しない者はいなかった。そこで、ブラジャーのカップサイズについての認識と計測値（乳頭囲胸囲－下部胸囲）から算出したカップサイズとをクロス集計した(表3)。認識と実測値が一致した者は23%であり、残りの者はカップサイズを間違えて購入しているといえる。特にFカップの者がBカップと答える例も見られ、身体に適合しないブラジャーを着用している者が多く存在した。さらに、購入

表3 自己の認識するブラジャーのカップサイズと計測値から求めたカップサイズ (%)

	計測サイズ							合計
	AA	A	B	C	D	E	F	
AA	-	-	-	-	-	-	-	-
認識 A	-	0.9	13.0	8.9	10.7	3.5	2.7	39.7
B	0.9	-	20.9	15.7	15.7	4.4	1.8	59.4
サイズ C	-	-	-	0.9	-	-	-	0.9
D	-	-	-	-	-	-	-	-
E	-	-	-	-	-	-	-	-
F	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	0.9	0.9	33.9	25.5	26.4	7.9	4.5	100.0

注) ゴシックは自己の認識と計測値が一致した者

時に「いつも試着をする」者は7.9%であり、試着もしないまま誤った認識で購入している実態が明らかになった。ファンデーションのもつボディメーキングやサポートなどの機能を充分に果たすために、適切なサイズのものを選択する必要がある、その際試着は最も確実な手段として有効である。ファンデーションについては、からだつきを把握するとともに、必ず試着することの必要性を知らせることが重要である。

5 考察

大学生は多くの者が被服の調達行動の主体となっていると考えられるにもかかわらず、サイズ表示を正確に理解できていないばかりか、自分の身体寸法も正確に認識していないことが明らかになった。以上のように初等・中等教育を既に終えた段階で、未だにこれらの既製衣料調達のための基礎的能力が確立していないことが、既製の衣料には身体に合わない部位があるとすの一因と考えられた。そこで、先ず消費者に対して、何故、規格化やサイズの標準化が必要であるかについて理解させることが重要な課題であると考えられる。現在の日本ではJIS規格に規定された基本身体寸法や計測方法、規格、表示方法が用いられているが、これは体型の変化や合理化を目指して改訂されてゆくものである。一方、国際化に伴いISOやEC統一規格などの諸外国の衣料サイズ規格に対応する必要性も考えられる。しかし、衣料サイズの規格化や標準化の基本的な理念や手段に相違はなく、これらを理解しておくことが内外の衣料サイズ規格や改訂されてゆく新しい規格にも対応できる基礎的能力となると考えるためである。その上

で、被服を着こなし、使いこなすための実践的知識としてJIS衣料サイズ規格の概要、表示の読み方、基本身体寸法の計り方について正確な知識を与えることが必要であるといえる。体つきについては、体型が加齢にともない変化することから勤や経験に頼らず、計測によって身体寸法を把握することの重要性などを理解させることが必要である。

次に、被服の身体への適合性を評価する能力を高め、感性を磨くことも重要な課題である。被服は人体をとりまくもっとも身近な環境であり、その快適性を評価し、精神的にも、身体的にも快適な環境を保証できることは各個人にとって重要なことであるといえる。

そこで、われわれは規格化に対する理解を得る場や情報を提供する場、適合性に関する感性を磨く場を積極的に構築して行かなければならないと考える。まず、規格に関する情報を提供する方法の身近な例としては、販売店の店頭、新聞・雑誌等のメディアを通して誰でもが分かりやすく正しい、質の高い情報を提供する方法などが考えられる。また、教育課程に積極的に組み入れることも必要であると考え。日常的に立体構成の被服を着用する衣生活になってから、わが国ではまだ半世紀余りしか経ていない。それゆえ学校教育で衣生活行動の自立を援助する基礎的教育がなされることは有効であると考え。さらに、今回の結果や家政学会被服構成学部会の調査¹³⁾で30歳代以上の年齢層においても表示に対する認識が低かったことから生涯教育の一環として組み込むなど、現状では学校教育を終えた後の年齢層に対しても何らかの形で教育や情報提供が必要であるといえる。

一方で、既製衣料品についての適合感が低い理由として、体型に年代差が認められるのにも関わらず、男性の衣料サイズ規格は1980年以来改訂されていないことなど規格そのものに関わる問題点なども明らかになった。体型の年代差を考慮した衣服設計も今後の課題であることが分かった。

要約

本研究の目的はJISによって定められた衣料サイズ規格や身体計測方法が、現在の衣生活行動においてどのように機能しているのかを捉え、被服の身体への適合性向上のための課題を検討することである。

調査は、静岡県に在住する大学生男性73名、女性114名を対象に、アンケート形式による質問紙調査と身体計測調査を1990年7月から9月に実施した。質問紙調査の調査項目は、調査対象者が認識している自己の身体寸法、既製の身体への適合に関する意識、衣料サイズ表示に関する認識などの計46項目である。身体計測調査は工技院体格調査の方法に準じ、マルチン式計測器具などを用いて、男性52項目、女性55項目について実施した。

主な結果は以下の通りである。

1) 男女とも約3割の者が既製衣料が体に合わないと答えた。部位別の適合感では、男性は大腿部、女性は袖丈について不適合を感じている者の割合が、約4割であった。ほとんどの者が平均的体格であったのに、既製衣料品の適合感は低かった。

2) 男女ともほぼ全員がサイズ表示の存在を知っていたが、衣料サイズの表示に対する理解の程度は低かった。すなわち、サイズ表示が読みとれないまま被服を選び、着装している実態が明らかになった。

3) 本人が認識している自分の身体寸法と実測値との差を求めた結果、周径項目は正しく認識している者の割合が低かった。「体型」や「号数」についても認識と実測値が一致する者の

割合は極めて低かった。自分の身体寸法を正しく把握せずに被服を調達していることは、既製衣料が身体に適合しないと判断する要因の1つになっていることが推察された。衣服寸法を2ピッチ以上の大きな誤差で認識していた者が存在したことなどから大学生は着装した被服の適合性を評価する能力が低いと考えられた。

4) ファンデーションは、大半が自分で調達しながら上衣・下衣と同様に寸法を誤って認識していた。いつも試着をして購入している者は1割に満たなかった。高い精度で身体適合性が要求されるファンデーションは、からだつきを把握し、さらに試着をすることが必要であることの認識が不十分であるという実態が明らかになった。

以上の結果から、既製衣料の身体への適合感を改善するには、まず規格化や標準化の必要性について理解させることが重要な課題であり、体型の年代変化や国際化時代の衣料サイズ規格に対応できるための基礎的能力となる。体つきの加齢変化を知り、身体寸法を知ることの重要性や計測方法を理解させることも必要である。さらに、被服の身体適合性を評価する能力を高め、感性を磨き、環境としての被服の快適性を保持することの重要性を認識させ、実践させることの必要性が明らかになった。学校教育をはじめ、学校教育終了後にも生涯教育の一環として取り入れることによって、衣料サイズ規格に対する理解を得ることや適合性に関する感性を磨くことを積極的に推進することを提言する。

本報の一部は第43回日本家政学会大会（東京,1991.5.25）において口頭発表した。

身体計測調査における本学部被服学研究室の秋山裕子嬢、池谷美子嬢、門野直子嬢、川島純子嬢のご助力に対し感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 深作光貞他：座談会快適性、織消誌 26, 4, 152, (1985)
- 2) 多々納道子：衣生活管理能力の研究（第1報）－大学生の衣生活の実態と意識－, 日本家庭科教育学会誌 26, 2, 75～82, (1982)
- 3) 多々納道子：衣生活管理能力の研究（第2報）－大学生の衣生活における性別役割意識と学習要求－, 日本家庭科教育学会誌 28, 1, 39～46, (1984)
- 4) 中川早苗：衣生活システムの理論的・実証的研究（第3報）女子大生の生活場面と着装基準に関する研究, 家政誌 37, 5, 397～403, (1986)
- 5) 藤原康晴：女子大生の好きな被服のイメージと自己概念との関連性, 家政誌38, 7, 593～598, (1987)
- 6) 渡辺澄子・川本栄子・中川早苗：服装におけるイメージとデザインの関連について（第1報）イメージを構成する主因子とデザインの関連, 家政誌42, 5, 459～466, (1991)
- 7) 高森寿：既製衣料のサイズ表示に関する認識とその身体適合の実態 男子学生の場合, 熊本大教育学部紀要人文科学40, 137～148, (1991)
- 8) 高森寿：既製衣料のサイズ表示に関する認識とその身体適合の実態 女子学生の場合, 熊本大教育学部紀要人文科学40, 125～135, (1991)

- 9) J I S 衣料サイズ推進協議会・体格調査委員会編集, 衣服寸法設定のための身体計測実施要領及び写真集 (成人編), 株式会社カネボウファッション研究所, (1980)
- 10) 厚生省保健医療局保健増進栄養課編: 国民栄養の現状 昭和63年度版 - 昭和61年国民栄養調査成績 -, 第一出版株式会社, (1988)
- 11) 通商産業省工業技術院・(財) 日本規格協会・J I S 衣料サイズ推進協議会: 日本人の体格調査報告書, (財) 日本規格協会
- 12) J I S 衣料サイズ推進協議会編: 既製衣料品サイズのすべて, (1980)
- 13) 日本家政学会被服構成学部会; 既製衣料サイズ表示と購入の実態に関する研究報告書, 日本家政学会被服構成学部会, (1991)
- 14) 赤根由利子: 既製服とサイズの適合性, 土浦短大紀要10, 27~38 (1982)
- 15) 山名信子・大志万八栄子・中野慎子: 体格と衣服寸法に関する意識調査 (第3報), 織消誌 20, 10, 450~454, (1979)
- 16) 大村知子・稲葉和子: 衣料品の寸法基準に関する中学生の意識について (I), 日本大学三島学園生活科学研究所報告書3, 57~64, (1980)
- 17) 大村知子: 衣料品の寸法基準に関する女子学生の意識について, 日本大学三島学園生活科学研究所報告書5, 29~35, (1982)